



イチゴはどうして赤い^{あか}の

イチゴは、まわりのつぶつぶが種^{たね}

イチゴの実^みは、花^{はな}のめしべに、おしべの花^か粉^{ふん}がついてできてきます。でも、たいていの果^{くだもの}物^{ぶつ}とは、ちょっとちがっています。イチゴの実^みの部分^{ぶぶん}は、花^かたく（めしべを支^さえていた部分^{ぶぶん}）とよばれる所^{ところ}で、種^{たね}は、実^みの外^{そと}側^{がわ}についている、小^{ちい}さいぶつぶつです。イチゴは、子^し孫^{そん}をふやすため、種^{たね}を遠^{とお}くまでばらまきたくて、実^みが熟^{じゆく}すと、赤^{あか}い目^め立^だつ色^{いろ}になります。赤^{あか}いあまい実^みを、鳥^{とり}やいろいろの動^{どう}物^{ぶつ}に食^たべてもらって、種^{たね}をふくんだ、ふんなどを遠^{とお}くにばらまいてもらうためです。大^{おお}昔^{むかし}から、人^{にん}間^{げん}によってさいばいされてきたイチゴは、実^{じっさい}際^{さい}には、根^ねから出^でてくる、ランナーとよばれる、特^{とく}別^{べつ}なくきでふえていきます。ランナーの先^{さき}に、根^ねができて、つぎつぎと子^こども^{かぶ}の株^{かぶ}が、ふえてきます。この子^こども^{かぶ}の株^{かぶ}を、なえにして育^{そだ}てま

イチゴの赤^{あか}い色^{いろ}は、アントシアンという色^{しき}素^そ

さまざまな赤^{あか}や青^{あお}などの花^{はな}の色^{いろ}や、秋^{あき}に赤^{あか}くなる葉^はの色^{いろ}などは、アントシアンという色^{しき}素^そでできています。イチゴの赤^{あか}い色^{いろ}も、このアントシアン^{いろ}の色^{いろ}です。

イチゴの実^みが若^{わか}いころは、葉^はと同^{おな}じ緑^{みどり}色^{いろ}をしています。葉^はと同^{おな}じ、葉^{ようり}緑^{よく}素^そという色^{しき}素^そがあるからです。実^みが熟^{じゆく}してあまくなってくると、葉^{ようり}緑^{よく}素^そがこわれて、太^{たい}陽^{よう}の光^{ひかり}があたる所^{ところ}から、アントシアンができて、赤^{あか}い色^{いろ}がついてきます。葉^はのかけになった実^みは、なかなか赤^{あか}くなりません。この色^{しき}素^そは、水^{みず}にとけ、酸^{さん}性^{せい}では、鮮^{あざ}やかな赤^{あか}色^{いろ}、アルカリ性^{せい}では、青^{あお}い色^{いろ}になります。

梅^{うめ}干^ぼしの赤^{あか}い色^{いろ}は、シソの葉^はのアントシアンが、梅^{うめ}ずで、赤^{あか}い色^{いろ}になったものです。

（監修・矢野 亮）

